第54回 身心変容技法研究会

自然体験と身心変容　―ゲーテ自然学からのアプローチ

　粂川　麻里生

（慶應義塾大学）

はじめに―ゲーテ自然学の動機

・近代自然科学に対する疑念：デカルト、ガリレオ、ニュートンの後継者たちに。

・法則＝普遍化、実験＝文脈の限定、体系化、概念化、理論化、因果関係の探求、

　データ化＝数値化、数学的演算、物質主義、知覚＆精神の排除

「どの面を注視しても、自然から無限のものが発する」[[1]](#footnote-1)

「顕微鏡と望遠鏡は、ほんとうのところ、純粋な人間感覚をかき乱す。」[[2]](#footnote-2)

「18世紀は、主として分析にたずさわったということで称賛される。こうなると19世紀に残された課題は、現存する誤ったいくつもの総合をあばき出して、その中身を改めて分析することである。」[[3]](#footnote-3)

「感覚はまどわさない。判断がまどわすのだ。」[[4]](#footnote-4)

「対象とぴったり一致し、それによって本来の理論と化す繊細な経験的知識がある。しかし精神的能力のこういう高揚は、高度の文化が発達した時代のものである。」[[5]](#footnote-5)

「いかなる現象も、それ自体では、またそれ自体からは、説明できない。ただ、多くの現象を集めて概観し、方法的に整理してのみ、究極的に、理論とみてもいいものが生まれてくるだけである。」[[6]](#footnote-6)

・エコロジー～自然に「参加」する学問

「主体のうちにあるものはすべて客体のうちにあって、なおその上にあまりがある。客体のうちにあるのもはすべて主体のうちにあって、なおその上にあまりがある。

　わたしたちは二重の仕方で失われた、もしくは安全に守られた存在である。

　わたしたちが客体にそのあまりを認めれば、私たちの主体を守り抜くことになる。」[[7]](#footnote-7)

「とはいえ

　―物理学者に

「自然の内部へは」

ああ、俗物よ！

「いかなる被造物の精神も入りこむことはできない」

私や兄弟姉妹たちに

そんな言葉を

思い出させないでくれ！

我々はこう考える―　その場所ごとに

我々は内部にいるのだと。

「幸いなるかな、自然の

外皮のみを見る者たちよ」

こんなことを私は六十年もくり返し聞いてきた。

私は呪う、ただしひそかに。

ひとりで、千回のそのまた千倍もこうつぶやく―

自然はすべてを、豊かに、喜んで与えてくれる

自然には核もなければ

外皮もない

自然はすべて一回限り。

よく考えてみるがいい、

君自身、核であったり、皮であったりするのかどうかを。」

・行為＝形態＝学知

「学問においても、人は本来何も知ることができな。つねに実践が必要である。」[[8]](#footnote-8)

・モナドロジー：ライプニッツ、17世紀のオルタナティブ

「私たちが神と自然からいただいた最高のものは、生命である。それは休息も安静も知らないモナスの自転運動だ。生命を守り育てようとする衝動は、消し去りがたい仕方で、誰にでも生まれつき備わっている。しかしながら、生命の内実がいかなるものかは、私たちにも他の人々にも秘密のままにとどまる。」

「上方よりはたらきかけてくる存在がもたらす第二の恵みは、体験されたことであり、知覚することであり、すなわち生き生きと動いてやまないモナスが外界という周囲の環境へと入り込んでいくことである。これを通じてモナスは初めてみずからを「内的には無限であるが外的には限界をもつもの」として自覚する。こうした体験について、私たちは――当人の素質や注意深さや幸運がかかわってくるとはいえ――自分自身の中ではっきりと知ることができる。ただし他の人々にとっては、この内実もまた変わることなく秘密のままにとどまる。」

「そして三つ目に、私たちが行動や行為、あるいは言葉や書き物として外界に対して差し向けるものが展開してくる。このものは、私たち自身に属するというよりは外界に属する。そしてまた外界も、私たちよりも早く、こうしたものについて了解することができる。しかしそれでも外界は、このものをしっかり明解に理解するために、私たちによって体験されたものについても可能な限り多くのことを知らなければならないと感じる。それゆえひとは、幼年期、自己形成の諸段階、生活の細々としたあれこれ、逸話などといったものにも興味津々なのだ。」

[[9]](#footnote-9)

２．富永半次郎の「五蘊」によるゲーテ理解

・「正覚」という現象。

「克く考えてみると、なる程歴史にないといふことは人類的に稀有である人間の事象の故に歴史の方が反って見過したり、誤解し、歪曲したりしてゐるだけのことであって、歴史上皆無というわけではない。現にゲーテも釈迦も其の眞は見失われて曲解されている人類的な不幸な実例であるのである。歴史上実例がないのではない。現に我々が知っているだけでも他に三四を数えるがそれ等も皆同様に其の新は失脚された上、誤り伝えられてゐることでは皆同一である。恐らく此の様な事実は他にも相当あるであらうが、失脚や誤伝等のためむしろ歴史的に湮滅してゐることであらう。

　どうして此の正覚体験に限って此の様なことになるのか。」[[10]](#footnote-10)

「此処で文献といふのは勿論通途の意味でない、（……）釋迦チャーパーラ･チャイチャ下の正覚体験だけの意味に限って使ふのであるから、従って同じ釋迦と雖ガヤー成道の意味ではない。況して孔子の知天命の意味でもないのである。それは其の思想が理論的に一般には超越して勝れてはゐるが、チャーパーラの釋迦体験には及ばないのである。

（……）併しながらそれは古から今日まで伝統的にはそれ以上の文献と称すべき典籍は無いと思われて来てゐる。それといふのもそれを比較対照すべきものを今日までの人類は有っていない。併しさういうものが無いといふのではなく、実は有っても知らなかったからである。それは知らうとしても知ることが出来なかったので其のまゝ今日までに至っているのである。それといふのも従来の人類は此の両者の差異を比較甄別し得る精紳能力を発揮するまでに一般はなってゐなかったし現在もまだしてゐないのである。」[[11]](#footnote-11)

・「覚者」としてのゲーテ

「今まで知ったことは大小乗何れもsamskara の否定的停止か、抹殺の理論による行法で、そしてそれによって達せられるとする所は涅槃とか實相とか判ったやうな判らないやうな、當になるやうな當にならないやうなことで、人間としての事実のたしかなことは厭世無常の気分の態度だけであった。人としてこの現世に生じた以上はそんなめそめそして厭だと想ってゐる人の世にいきてゐるなどといふことは意味がない。それでも堂々たる宗教であらうか。」[[12]](#footnote-12)

「ゲーテの無常観徹底の経路は、其の天才の中世、近世の哲学、宗教を通しての當時の啓蒙期の自然科学的陶冶の結果であり、法華子のは所謂ヴェーダンタ運動の思潮に捲き込まれた滅後佛僧団の紛争に其の天才が試練を受けて遂に釋迦正覚の五蘊体系に啓発した結果であるから、謂わゞ本格的正覚の道を取ったことになる（……）。」[[13]](#footnote-13)

「実は此方で仮りて応用するまでもなく、当のゲーテMorphologie の考が自然に発達してどんな経過を辿ったかはその晩年のファウスト第五幕剏作の完成とその絶筆となったフンボルト宛の手紙を見れば人間の五蘊作用の変化がその極致においてどのような様相を取るかの近代的な実例を知ることが出来る。」[[14]](#footnote-14)

「動物はそのオルガーネOrganeを通して教へられる」と古人は申しましたが私はそれに附け加へて、勿論人間とても同様ではありますが、人間は更にそのオルガーネを教へるという云ふ特徴を有ってゐると申し度いのです。

　人間のどんな行為も、従ってどんな才能もアンゲボルネ Angeborneに因るものです。そのアンゲボルネはそれ自ら作用してゐて、必要な條件に対して工夫を凝らすもの（nötige Anlage）でありますが、その事は意識し得ないもの（unbewusst）なのです。そのウンベヴストの故に又ひたむきに作用を続けます結果、それ自体法則的ではありますが、畢竟して目標もなく、目的も無く終始することになるものです。

　其の人の性来のアンラーゲ（natürliche Anlage）の正しい向上の資たる或る手芸、ある文芸があるといふことに気が付くことが早ければ早い程、それだけ人は幸福であります。其の人は外界から何を感受しましても、其のものは其の人の為人の個性（eingeborne Individualität）を少しも傷つけません。最も優れた剏造（das beste Genie）といふものはかういふものです。あらゆるものを採り入れてその凡てを自分のものにすることの出来るものです。而かも其の間、固有の素質―それは一般には性格と呼んでゐるものですが―それには少しも障害となりません。それどころか、それあって始めて其の性格と呼ばれてゐるところのものを正しく高め、そして出来るに従って徹底的に有能にします。

　此処まで来ますとべヴスト（意識的なもの）とウンベヴスト（意識的でないもの）との間に多種多様な関係が生じてきます。一つの完全な総譜を作り上げようとしてゐる作曲家を考へて見ませう。其の場合意識と意識でないものとは恰も経と緯のやうな関係になります。そのことは私が常に好んで用ひてゐますグライヒニスGleichnis（事象）なのです。

　人間のオルガーネは修習、学問、考慮、成功や失敗、促進と障害、そして又絶えざる反省熟慮の間に、習得したものをアンゲボーレネに意識しないで自由に振る舞ひながら結び付けます。さうしますとその結果世界を唖然たらしむる奇（eine Einheit）が生じます。」

（一八三二年三月フンボルト宛書簡･富永半次郎訳）

「これ程にサンカーラを説明したものは一切蔵経にも無ければ猶又爾後の大論師、学匠にも亦現在仏教学者にも無い。もちろんゲーテが五蘊を知っていて五蘊のサンカーラを説明したのでないことは明かである。」[[15]](#footnote-15)

「色蘊（しきうん、梵: rūpa） - 人間の肉体を意味したが、後にはすべての物質も含んで言われるようになった。（例：桜そのもの）

受蘊（じゅうん、梵: vedanā） - 感受作用（例：桜の木をみて「美しい」と感じること）

想蘊（そううん、梵: saṃjñā） - 表象作用（例：眼をつむって「桜」というイメージを思い浮かべること）

行蘊（ぎょううん、梵: saṃskāra） - 意志作用（例：桜の枝を瓶にさしてみようと思い巡らすこと）

識蘊（しきうん、梵: vijñāna） - 認識作用（例：「桜」と認識すること）」

（wikipedia「五蘊」の項より）

３．フランシスコ・ヴァレラの《五蘊》理解

・「西洋思想」を超えるもの

「西欧の科学文化は、物理的な身体観だけでなく生きられる身体観、つまり、「外側」と「内側」を合わせもつ、生物学的であると同時に現象学的な身体観に至るべきだというメルロ＝ポンティの考えにわれわれは賛成する。この身体としてあること（embodiment）の両面が対立するものでないのは明らかだ。むしろ、われわれは絶えず両面を行きつ戻りつするのである。メルロ＝ポンティは、この循環を理解するにはその基本軸を詳細に研究すること、つまり、知識、認知、経験を身体化しなければならないことを認めていた。メルロ＝ポンティだけでなく、われわれにとっても、「身体としてあること」にはこの二つのいみがある、つまり、生の経験の担い手としての身体と認知機能のコンテクストまたは環境としての身体である。」[[16]](#footnote-16)

「西洋の伝統にあって、現象学は人間経験に関する《典型的な》哲学、すなわち、上記の課題を扱う唯一の思想の殿堂であったし、今もそうである。しかし、それはとりわけ理論的な反省としての哲学であり続けている。ギリシャ時代以降の西洋伝統のほとんどで、哲学は、抽象的な理論構築だけで真理（心に関する真理を含む）を見出そうとする学問であった。理性を批判ないし問題視する哲学者でさえ、それをするのに証明や立証、および（特にいわゆるポストモダン派は）言語学的な証明（すなわち、抽象的な思考）を利用してきた。（……）

しかし、理性から目をそらし、心を知るための方法として理性を採用しないとなると、代わりに何が使えるのか。」[[17]](#footnote-17)

「ここで提案したいのは、抽象的で身体と一体化していない活動から、身体としてある（三昧）、広い解釈が可能な（開かれた）反省へと反省の性質を変化させることである。ここで《身体としてある》とは、身体と心が一体化した反省を意味する。この論述が伝えようとすることは、反省が単に経験に“ついての”ものではなく、経験そのものの形式“である”ということ、および経験の反省形式が三昧/覚を用いて実践しうるということなのだ。」[[18]](#footnote-18)

「三昧/覚修行の基礎は、端座（三昧/覚の研究室的状況）の間や日常生活において瞬時に生起する経験に心を弛緩させて集中することにより三昧を鍛えることなのである。身体としてある状況の詳細に繰り返し注意を払うことによって、起こっていることに対するアウェアネスはますます自発的になる。最初は思考や感情の閃きにすぎないものが、その生起を詳細にみることで、より鋭く、より明瞭になっていく。さらなる上達により、心の動きへ払われる注意は十分繊細かつ迅速になり、三昧を特別な態度としてみなさなくなるに違いない。三昧は自発的に存在するようになれば存在しなくなる。次いで、アウェアネスと心の動きとのこの分かちがたい状態がさらに安定すると、五蘊の刹那から刹那への微妙な進歩（連続的であれ同時的であれ）を観察することが可能になるのだ。

（……）

　五蘊のなかの自己探索では、空手で戻って来たようにみえる。つかもうとしたものがすべて指からすり抜けて、残ったのは、つかめるものは何もないという感覚だけである。ここで小休止して、われわれが見出せなかったものが何であるかを想起することが肝心である。

　（……）われわれが見出し得なかった唯一のことは、真に存在している自我ないし自己なのである。しかし、注目すべきは、われわれが経験を見出したことである。実際、まさに嵐の経験を見る目の中に入ったのだが、そこに自己、《私（アイ）》はないということである。」[[19]](#footnote-19)

「換言すると、五蘊が経験に満ちていることがまさにそれに自己がないことと同義なのである。」[[20]](#footnote-20)

４．グレゴリー・ベイトソンの総合学－「マインド」の結合と「抽象度」の上昇

「われわれは、音楽という例外を除いて、パターンというものを固定して捉えるよう訓練されている。その方が易しいし楽なことは間違いないが、それでは意味がない。結び合わせるパターンというものを考え始める時の正しい道筋は、それがまず第一に（ということの厳密な意味はさておき、）相互に作用しあう部分の演じる舞踏（律動を持った動き）なのだということ、さまざまな物理的な限界と各生物体が固有に持ち合わせている枷によって固定されるのは二次的なことなのだということである。」[[21]](#footnote-21)

「ラッセルとホワイトヘッドが取り組んでいたのは、実に抽象的な問題だった。数学上の議論で論理階型の違いが無視された時に生じる混乱から論理を救い出さねば、と論理の信奉者であった彼らは奮闘したのだった。（“論理階型”logical typesという言葉を生んだのはラッセルである。）もっとも『数学原理』執筆中の彼らの頭の中に、今自分たちは人間ばかりか他の生物にとっても決定的に重要な問題に関わっているのだという意識があったかどうかは疑問である。確かにホワイトヘッドは、論理階型をいじくり回して遊ぶところに人間はおかしみを覚え、そこにユーモアが生じるということを認識してはいた。が、彼がそのゲームを楽しむところから一歩進んで、そのゲームが生物界全体に光を投じるほどの大きな意味を持っているのだ、という視点を獲得していたとは思われない。」[[22]](#footnote-22)

「この種の見比べを重ねてゆくその行く手に控えているのが、〈自然界を満たす精神〉についての問題である。それを考察していく中でも、われわれはやはり創造的な比較作業を強いられよう。認識論とは、最大に押し広げられた意味での〈マインド〉――進化と思考と適応と発生と遺伝のすべて――をテーマとして包み込む不可分に統合されたメタ科学［meta-science］である、というプラトン的テーゼの上に本書は立つものである。」[[23]](#footnote-23)

結論：「モナドロジー」と心身変容

・原形と共感覚

　－「原形」はどの感覚でとらえるか？　→「つかむように見ろ」（ゲーテ）

　－「雰囲気」と共感覚。

　－実感と離人症。（木村敏）

　－本当につかめば、「参加」する。

　－整体。「肚」でわかること、見ること。背骨。

1. ゲーテ「箴言と省察」：『ゲーテ全集13巻』所収、潮出版社、203頁。 [↑](#footnote-ref-1)
2. 「箴言と省察」、274頁。 [↑](#footnote-ref-2)
3. 同上。 [↑](#footnote-ref-3)
4. 前掲書、247頁。 [↑](#footnote-ref-4)
5. 前掲書、278頁。 [↑](#footnote-ref-5)
6. 前掲書、277頁。 [↑](#footnote-ref-6)
7. 前掲書、279頁。 [↑](#footnote-ref-7)
8. 前掲書、248頁。 [↑](#footnote-ref-8)
9. 「箴言と省察」237頁。 [↑](#footnote-ref-9)
10. 富永半次郎『釋迦佛陀本紀余論』千谷七郎編、私家版、1956年、434頁。 [↑](#footnote-ref-10)
11. 前掲書、1123頁。 [↑](#footnote-ref-11)
12. 前掲書、680頁。 [↑](#footnote-ref-12)
13. 富永半次郎『正覚について―釋尊の佛教』、同書刊行会編、1984年、159頁。 [↑](#footnote-ref-13)
14. 『釋迦佛陀本紀余論』55頁。 [↑](#footnote-ref-14)
15. 前掲書、62頁。 [↑](#footnote-ref-15)
16. フランシスコ・ヴァレラ＋エヴァン・トンプソン＋エレノア・ロッシュ『身体化された心』（田中靖夫訳）、工作舎　2001年、13頁。 [↑](#footnote-ref-16)
17. 前掲書、46頁。 [↑](#footnote-ref-17)
18. 前掲書、56頁。 [↑](#footnote-ref-18)
19. 前掲書、122頁。 [↑](#footnote-ref-19)
20. 前掲書、123頁。 [↑](#footnote-ref-20)
21. グレゴリー・ベイトソン『精神と自然　生きた自然の認識論』(佐藤良明訳)、新思索社、2001年、16頁。 [↑](#footnote-ref-21)
22. 『精神と自然』157頁。 [↑](#footnote-ref-22)
23. 『精神と自然』119頁。 [↑](#footnote-ref-23)